

向学館通信

2008・10・27

来春受験の人は、いまから全力で進もう

公立高校を受験する人は、あと4か月半です。私立高校なら約3か月ちょっとしかありません。大学のセンター試験では約2か月半です。あとわずかな日数を、悔いのないように全力で自分の力を試してください。

作文・小論文の学習について

小論文は、大学のAO入試のほか、いろんな入試形態でも出されることがあります。さらに、今年からは、京都の公立高校の「特色選抜」でも、作文または小論文が出されています。他府県では、高校入試の「国語」のなかに作文が課せられているところも増えてきました。こうした傾向は、今後も強まるものと思われます。

なぜ、普通のテストでなく「作文・小論文」が重視されるようになってきたのか。これらは知識の有無を問うテストや理解度を試すテストとどう違うのか。といったことを、少し考えてみたいと思います。

大まかにいえば、従来型のテスト（高校入試でも大学入試でも、学校の定期テストでも）では、人間の能力の中で「記憶力」が最も多く試され、「理解力」はそれより小さな割合で試される、といった相場だと考えています。こうした能力は、「インプット能力」といってもいいかもしれません。これに対して、知識や考えを整理したり組み立てたりして「表現」するとか、人を「説得」するといったことは、いわば「アウトプット能力」といえるでしょう。

最近、外国の小学校の国語教育の紹介がふえています。わが国の国語教育との大きな違いとして、「自分の意見を述べる」「人の意見を聴き、それに批判を加える」「討論が上手にできる」などが国語教育の中に定着していると、指摘されています。これに対して、わが国の国語教育では、「話す」「文章を書く」「討論する」などはほとんど実践されてきませんでした。こうしたことの結果として、人前で堂々と話が出来ない人が多いという、多くの日本人の不幸な特徴が形成されたのだと思います。アウトプット能力の低さが、対人関係の下手さや、自分の気持ちをうまく伝えられないためにキレやすいといったことにもなるのかもしれません。

表現力、構想力、説得力などは、人間の能力の中の重要な部分だと考えますが、これまでの教育では、ほとんど扱ってこなかった領域と言えます。しかし、こうした能力の重要性が理解され、社会的にも必要不可欠になってきたために、入試にも「表現力」が課されるようになったのだと考えます。社会で活躍する上で、アウトプット能力は非常に大きな役割を担っています。この能力を鍛えることをわが国の教育は、長い間怠ってきたわけです。

文章を書く力は、そんなに簡単に身につくわけではありません

最近、突然塾に来られて、「大学入試を小論文で受けたいのだが、論文を書く要領を教えてもらいたい」とか、また、「高校の特色選抜を受けたいので小論文の書き方を教えてほしいのだが、10回ぐらいの授業でわかるように指導してほしい」といったことも言われます。

こうした安易な考え方をかなりの人が持っておられるようです。しかし、作文や小論文は、そんなに簡単ではありません。とくに、小論文は、作文と違って、自分の主観で書いてはいけないのです。客観的な判断と論理的な正しさが求められます。ところが、論理的・客観的なものの考え方が身につけていない人にとっては、自分ひとりの考え方や願望で、話を進めがちです。物事を客観的に見る（自分の考えを入れないで、ものごとをありのままに見るという見方）というのは、そのことについてかなりの知識があってはじめて可能になる見方です。ところが、学校で習う理科でさえ論理的につかめずに暗記すればすむと考えているようでは、論理的な思考自体がなかなか分かってもらえないのです。

小論文を書くには、さまざまな分野の知識があって、それが「印象」みたいなあいまいなものではなく、「論理的に」整理されて身につけている、ということが前提になります。だから、当塾での小論文指導も、いろんなジャンルの知識をつけるということに時間と労力がかかっているというのが実情です。この点で、作文の指導とは全く違うということを理解してください。

早くから文章を書く習慣を身につけると、深く考える力がついていきます。推奨します。